附属中学校との協働（ビオトープづくりを核とする中庭プロジェクト）

理数教育研究センター　特任教授　松村 佳子

2010 年、附属中学校では、中庭とその周辺を生態園として作り上げていく「中庭プロジェクト」の活動を始めた。ビオトープ池は、2010 年 3 月に毎日新聞社の協力を得て中庭と体育館南側の 2 カ所に作られた。ビオトープ池を中心として展開されている中庭プロジェクトは、ESD（持続可能な開発のための教育）の一環である環境教育の柱として、いくつかのテーマで取り組みをしてきている。本学の理数教育研究センターと自然環境教育センターは、主に「ビオトープ池の観察」と「学級水田づくり」に協力して活動を進めている。

ビオトープ池の観察や管理を通して、生徒達は季節とともに生物が変化していく様子を肌で感じることができた。6 月には蓮の花が咲き、7 月にはトンボが飛来してトンボ池の機能を持つようになった。11 月には中庭の池に植えたマコモを刈り取り根元は食用に、葉はしめ飾り用に使った。池の管理については、生徒達は一生懸命試行錯誤をしてきた。水の減り方が多い 4 月頃には、池の周りに堤防を作った。また藻が増えすぎて水が汚れたときには、金魚やメダカを入れればよいかもしれないと、理数教育研究センターからメダカをもらって放したら、数が一気に増えた。これらの活動を通して生徒達は、人間と自然との関わりや、自然と共生することの大切さに気づくようになった。感想文の 1 例を以下に示す。「ビオトープ池の観察」活動については、毎日新聞（2010 年 5 月 14 日）で紹介された。

池の世話をする環境委員の生徒たち

僕はこの活動を続けてきて、自然の生態系を改めて考えた。

僕にこのことを考えさせたのは、ビオトープ内の生物の多様性である。

最初はマコモと水しかなかったビオトープにミジンコやアメンボ、カエルなどが住みつくようになったときは、とても感動し、嬉しかった。

今ではこの小さな「中庭ビオトープ」は、たくさんの生物があふれている。でも、もしここからミジンコがいなくなったら・・・、ヒメゲンゴロウが泳がなくなったら・・・この池から生物がいなくなってしまうかもしれない。

僕は生物を見つけたときの感動を忘れたくないし、地球規模で考えたときに、とても恐ろしくなる。だから僕はいつまでもこのビオトープの経験をもとに、自然のバランスを大切にし、生物と人間の共存できる環境づくりを心がけたい。（環境委員生徒）

学級水田づくりは、トロ舟 1 つずつをクラスの学級水田として割り当て、大学の自然環境教育センターから苗を譲り受け、各クラスで稲を育てた。苦労をして育てた稲を秋には収穫して僅かだが米を口にすることができた。この活動から「農業の大切さと食べることのありがたさ」を感じることができた。

中庭プロジェクトの取り組みについては、本学「教育実践研究センター研究紀要」第 20 号（2011 年 3 月）及び 21 号（2012 年 3 月）に掲載された。